

ネトリタイムトラベル



小説モーメント

二〇二二年、俺は長年の夢……いや、人類にとっての長年の夢を發明した。

それは、タイムマシンだ。

これがあれば未来から過去へ、過去から未来へ自由自在に行くことができる。

光化学研究所で研究員として勤め始めたのも、タイムマシンを發明するためだった。

小学生の時に思いついたアイデアを温め続け、やっと三十歳になって実現したのだ。

べつに超小型加速器で粒子線がん治療器を作るためではない。

全てはタイムマシンを完成させ、若き日の父親から母親を寝取る為の計画なのだ。

ときわたりたくま
俺は時 亘 詫間。

タイムマシンはちよつとしたきっかけで、小学生の俺でも簡単に思いつける、原理だった。

そう、タイムトラベルはコロンブスの卵のようなもの。その原理は……。

いや、話すのはやめておこう。

きっかけを説明するのは簡単だが、原理を理論立てて説明すると日が暮れるので話すことはやめておく。

それよりも今は母親に会える喜びに浸りたい。

今日は母の命日だ。

母さんの命日に墓参りするみたいで、まるで親孝行みたいじゃないか。

俺は個人の研究室に置いてある、タイムマシン装置の電源を入れる。

このタイムマシンには、量子コンピュータと時計やモニター。カウンターの計測器あといろいろな装置が取り付けられていて。真ん中には座席がある。

それはまるで某アニメ風の見栄えだ。俺は座席に座り、沢山の電極が着いたヘルメットを被り、カウンターを一九九二年八月十八日に合わせる。

「さてよ。遥香(母親の名前)は僕を産んだのは確か二十歳の時だ」

「父さんと出会ったのが学生の頃だって言っていたから……」

「いや、それより三年前か？ 四年前か？」

「どうせなら、更に五年前の一九八七年に行こう！」

「どっちにしても十代の遥香に会える！」

「よし！ 決めたぞ！」

「一九八七年八月十八日にGO！」

俺はヘルメットに内蔵されているスイッチを入れ、「一九八七年に飛ぶ」と告げる。